

大乘莊嚴經論の研究

——菩提品第三十八偈、第五十五偈を中心として——

舟 橋 尚 哉

はじめに

この小論は先に発表した「大乘莊嚴經論の研究——菩提品第一偈、第三十七偈を中心として——」（大谷大学研究年報第三十二集、昭55年）の続篇である。従って大谷探検本（龍谷大学所蔵）のA本、B本を逐次参照してデキスト校訂を行いながら、「大乘莊嚴經論」菩提品の思想を明らかにしていこうと思うが、最近私はネパールのNational Archives より大乘莊嚴經論の貴重な写本（⁽²⁾ B_A本と呼ぶことにする）を手に入れることができたので、これも随時参照することにする。

一 威力の弁別について

⁽³⁾ 無漏界甚深に続いて「威力の弁別」(vibhūtvavibhaga)に關する十一偈が説かれる。

「⁽⁴⁾ 声聞たちの威力によって、世間的なものその（威力）は打勝たれ、独覺地「に属する威力」によって、声聞のそれ「威力」は打勝たれ」（第三十八偈）⁽⁵⁾ それ「独覺の威力」は菩薩の威力の一部分にも達しないし、それ「菩薩の威力」は如来の威力の一部分にも達しない」（第三十九偈）⁽⁶⁾

この二偈は安慧釈によれば、「無漏界における威力の最勝なることの殊別によって、諸佛の威力の殊勝なることを示す」ものといわれる。すなわち、

「⁽⁷⁾声聞の福智の資糧と神通とによって、世間の福智の資糧と仙人の神通等の威力は打勝たれ」

「⁽⁸⁾独覺地の福智の資糧と神通等の功徳によって声聞の威力は打勝たれ」

「⁽⁹⁾菩薩の福智の資糧と神通等の功徳に關して、獨覺の功徳は百分の一、千分の一、一億分の一にも達しないし」

「如来の福智の資糧と神通と「十」力と「四」無所畏等の功徳に關して、菩薩の威力と功徳は百分の一、千分の一、一億分の一にも達しない」

といつて、如来（諸佛）の威力の殊勝なることを説いている。

この第三十八偈^(c)の *pratyekabuddhehyo manah* は、勿論、⁽¹²⁾S. Lévi や長尾博士の訂正の如く、*pratyekabuddhabhaumena* と訂正すべきである。大谷探検本 A 本 (39a, 1, 1) も、B 本 (41a, 1, 5) も *pratyekabuddhabhaumena* と讀んでゐる。N₄ 本も *pratyekabuddhabhaumena* (25b, 1, 5) と讀んでゐる。なお安慧釈ではこの第三十九偈の註釈の直後に「⁽¹⁴⁾十地〔経〕中にも」とあり、十地経が引用されているが、このことについては、⁽¹⁵⁾すでに西尾京雄教授の指摘がある。

次に種類⁽¹⁶⁾の差別 (*prakāraprabheda* 様態の差別) と、甚深という特性とによって、諸佛の威力が如何に無量であるか、如何に不可思議であるかが説かれる。

「佛の威力は無量であり、不可思議であるといわれる。何人に対しても、何処にても、如何様にも、どれだけ〔の範圍〕でも、何時にても、はたらく」(第四十偈)

「何人に対しても」について安慧釈は、

「⁽¹⁸⁾人の為めに、はたらくことも無量にして、不可思議であり、一人二人の為めに行じないで無量の衆生の為めに、はたらく故に」

と内容をわかりやすく説明している。

以下の八偈(第四十一偈—第四十八偈)は同じく佛の威力に關するものであるが、転依の差別によって威力の差別を説いている。まず初めに五根の差別について、

「⁽¹⁹⁾五根の転依においては、一切のものの、一切の境に対する活動(*vyū*)において、また、千二百の功徳の生ずるにおいて、最勝の威力が得られる」(第四十一偈)

と説かれる。「⁽²⁰⁾五根が転依して清淨となるとき、威力の最勝は二種の最勝を得る」といわれる。すなわち、一つ

には「一切のものの、一切の境に対する活動」であり、二つには「千二百の功德の生ずること」である。前者の「一切のものの、一切の境に対する活動」とは、世親釈によれば、「一切の五根の一切の五境に対する活動」であるといわれ、安慧釈によれば、「清浄となれるとき、ある眼根によって色を見ることが出来、声を聞き、触せらるべきものを知ることが出来るに至る迄、余の根のすべての作用 (kamma) は為され得る」とあるように、すなわち、未転依の時には、眼根は色境のみに向って活動し、身根は触境のみに向って活動するが、転依した場合には、眼根のみによってあらゆる対象を知覚するという意味である。

また「千二百の功德を生ずる」ということは、安慧釈に「聖陀羅尼大自在王〔経〕と妙法蓮華〔経〕などの經典に出てゐる」とあるように、法華經の法師功德品に「八百の眼の功德、千二百の耳の功德、八百の鼻の功德、千二百の舌の功德、八百の身の功德、千二百の意の功德を得べし」と出てゐる記述と関連することが知られるが、これについても、すでに西尾京雄教授の指摘がある。

唯識では色とか触とかという外境がありえないのに、どうして五根の転依が成り立つのかという微難を予想し

て安慧釈では、唯識二十論の第九偈を引用して、

「或る自らの種子より、或る顯現有る了別が起るとき、彼〔種子と顯現との〕二は、彼〔了別〕の二種の処性なりと牟尼は説けり」(唯識二十論第九偈)

といい、その直後に「阿頼耶識の中に所取と能取との習氣と種子があつて、眼識より意識に至る迄六識が生起するときには、内の六処を説く、それらの識の中で、眼識の中に色としての顯現が生起する、乃至、意識より法としての顯現が生起するは、外の〔六〕処として説かれる」といって、唯識においても内、外の処という区別があることを説いている。

第四十一偈の直前の *manovṛttibhedena* は長尾博士がチベット訳によって訂正された如く *parāvṛttibhedena* の方がよい。大谷探検本には A 本 (39a, l. 5) も B 本 (41b, l. 5) もともに *parāvṛttibhedena* となつてゐるし、N_A 本も *parāvṛttibhedena* (25b, l. 9) となつてゐる。

次の第四十二偈、第四十三偈、第四十四偈の三偈は互いに関連をもっている。初めに第四十二偈は「意の転依」について説いてゐる。

「意の転依においても、威力と相応してはたらく、非常に無垢なる無分別智において最勝なる威力が得

られる」(第四十二偈)

安慧釈によれば「意」⁽³⁶⁾「根」というのは染汚の意のこと」であり、「染汚の意が転依しないとき、我見、我愛、我慢、我癡等の四随煩惱と相応して」⁽³⁷⁾いるが、転依した状態について世親の長行には、「意の転依において、威力に相応してはたらく非常に清浄なる無分別智において、最勝なる威力が得られる」と説かれている。

次の第四十三偈は「執受すなわち五識身の転依」を説いている。

「境⁽³⁹⁾ともなる執受⁽⁴⁰⁾(udgraha)の転依において、実に欲するままに受用を示現するために、国土の清浄に関して、最勝の威力が得られる」(第四十三偈)

世親の長行には、『境の転依』と『執受の転依』とにおいて国土清浄に関して最勝の威力が得られる」とあり、安慧釈にはそれを更に説明して、「境の声は色より法に至る迄の六境をいう。執受の声は眼識より身識に至る迄の五識身をいう」とあるように、執受すなわち五識身の転依は国土清浄と関連して説かれている。

次の第四十四偈は「分別すなわち意識の転依」について説いている。

「分別の転依において、常時に、一切の智慧と業と

の無障礙に関して、最勝の威力が得られる」(第四十四偈)

安慧釈によれば「分別の声は意識をいう」⁽⁴⁴⁾とあり、「転依するときは二種の最勝の威力を得るという意である」といわれる。二種の威力について安慧釈には「二つの威力とは(1)智慧が常に無障礙であることと、(2)すべての業において常に無障礙であること」とあるように、二種の威力とは智慧と業との威力のことである。続いて安慧釈では、「その中、智慧の声は大円鏡智と平等智と成所作智と妙觀察智をいい、その智によってあるものは知られるものは知られないのではなく、すべてのものは知られる。ある時には知られ、ある時には知られないのではなく、一切時に知られるとは、智が常に無障礙であるといわれる」と智について詳しく説かれている。

また業についても安慧釈に「業の声は変化⁽⁴⁸⁾(身)の事業を為す」とあるように、「変化身⁽⁴⁹⁾のすべての業が常に無碍であるということは、変化身とは積尊のように、この世に現われて、衆生救済を行うことをいうから、その働きがすべてにわたって常に無碍である」ことを説いている。

先にこの第四十二偈、第四十三偈、第四十四偈の三偈

は互いに関連をもつて説かれていと述べたように、この三偈が説く「意 (manas) と執受 (udgraha) と分別 (vikalpa)」は、莊嚴經論求法品第四十偈でも説かれる三種⁽⁵⁰⁾の顯現の、後半の sraṇaka-lakṣaṇa⁽⁵¹⁾である三種の顯現と相応していることが知られる。そしてその三種の顯現である「染汚の意」「五識身」「意識」がそれぞれ転

依して、「無分別清淨」「国土清淨」「智慧と業との無障礙」の威力を得るといわれる。これを求法品第四十五偈の四自在と対比させると、「無分別自在」「国土自在」と「智慧と業との自在」にそれぞれ相応し、これを図示すれば次の如くなるかと思う。

(53) 三種三種の顯現

(求法品第四十偈)

求法品第四十偈並びに第四十四偈の安慧釈 (北京版283-25, 284-38)

〔求法品第四十偈〕

grāhyalakṣaṇa

(所取の相)

依処 (pada 句) としての顯現——器の如き阿頼耶識

対象 (artha 義) としての顯現——六境

身体 (deha 身) としての顯現——六根

〔転依〕

五根の転依 (菩提品第四十一偈)

意 (manas) としての顯現

(無分別智における最勝の威力を得る)

〔転依〕〔求法品第四十五偈〕〔第四十六偈〕

意の転依

(菩提品第四十二偈)

〔菩提品第四十二偈〕

grāhakalakṣaṇa

(能取の相)

執受 (udgraha) としての顯現——五識身

(国土清淨における最勝の威力を得る)

〔転依〕

国土自在 (第八地)

五識身の転依 (菩提品第四十三偈)

分別 (vikalpa) としての顯現——意識

(智慧と業との無障礙における最勝の威力を得る)

〔転依〕

智慧自在 (第九地) と業自在 (第十地)

意識の転依 (菩提品第四十四偈)

次の第四十五偈は無住処涅槃を説く偈である。

「安住⁽³⁴⁾の転依において、無垢⁽³⁵⁾の立場において、諸佛の無住処涅槃という最勝の威力が得られる」(第四十五偈)

安住 (pratiṣṭha) については安慧釈に「安住の声によって、阿頼耶識とその「阿頼耶識」を所縁としてはたらく境界である器世間である大根本地をいう。阿頼耶識もまた、善不善の業の習気の依処であり、身と受用と処の如くに、阿頼耶自体がかくの如く「三つに」顕現するから阿頼耶に安住するといわれる」と説明されている。

四十五偈(d)のacaleは一応長尾博士の訂正によりamaleとして読んだが、それでよいかどうかを検討してみよう。長尾博士もS. Léviも注意されている如く、チベット訳はdrimed (amala) である。⁽⁵⁸⁾ Bagchi も amale と訂正している。⁽⁵⁹⁾ しかし漢訳の偈頌に「不動句」(大正三一、六〇五a)とあり、長行にも「不動無漏法界」(大正三一、六〇五a)とあり、また安慧釈にも「諸佛の不動処」(samskṛtas nams kyī mi gyo gnas)とあるところから、acala (不動)の可能性も出てくる。しかし大谷探検本を見ると、A本(39b, l. 6)もB本(42a, l. 2)もともにamaleとあり、N₁本(20a, l. 7)もamaleとなっているから、や

はり長尾博士の訂正通り amale と解した方がよいであろう。あるいは初めから写本に amale と acale の二種が混同されて伝えられていたのかもしれない。

次に姪欲 (maithuna) の転依について次の如く説かれる。⁽⁶²⁾ 「姪欲の転依において、佛の樂住に関してまた妻に対する無染汚の見に関して、最勝の威力が得られる」(第四十六偈)

姪欲について安慧釈は「姪欲は身根の一部分であって、女と男との二根が互いに結合するから姪欲といわれる。

この姪欲が転依する、すなわち非梵行の貪欲と離れるとき、二種の最勝の威力を得るとい意である」と説き、そしてここである「二種の最勝の威力」について安慧釈は「(1)佛の樂住において三昧の樂を得ることと、(2)妻に対する無染汚の見において貪欲を生じないこと」であると説明している。

次の第四十七偈は「虚空の想の転依」⁽⁶⁵⁾ (vyāpatti) を説く偈である。

「虚空の想の転依」において思惟せられた対象の増長に関して、また去ることと、色を觀察することに関して最勝の威力が得られる」(第四十七偈)

虚空の想の転依において、二種の威力が得られるとい

われる。すなわち、「(1)虚空蔵の三昧を得ること、(2)欲するままに行くことができ、壁や山等が無碍となり、またすべてに虚空のはたらきを思惟するとき、一切のものは虚空の表面の如くなる」といわれる。虚空想とは安慧(70)に「無碍なるところ、それは虚空の如しと分別するとき、有碍なるところ、それらは色であると分別するは虚空想といわれる」と説明されている。(大智度論、卷三)

佛の威力を説く十一偈(第三十八偈〜第四十八偈)の中、第四十一偈以下の八偈(第四十一偈〜第四十八偈)は「転依」を説く偈であるが、最後の第四十八偈は、それらの「転依」をまとめて次の如く説いている。

「以上の如く、無量の転依における無量の威力は、諸佛の無垢の所依において、不可思議の所作を成ずる〔からである〕と考えられたり」(第四十八偈)

世親(71)にはこれを説明して「そこ(無量の転依)において、諸佛の無漏界における不可思議の所作を成ずる威力は無量である」と説き、安慧(72)には「無量の転依によって、転依より生じた威力と功德も無量であるといわれる。無量の威力の如く、その如く威力より生じた変化身等は衆生のために佛の事業を成じても無辺、無量といわれる」と説明されている。

この第四十八偈(c)の *anusīhanā* はこのままでよいのかもしれないが、大谷探検本B本に *anusīhanā* (42a, 1. 8) とあり、A本も *anusīhanā* (mp) (40a, 1. 3) とあり、NA本も *anusīhanā* (mp) (26b, 1. 2) とあるところから、*anusīhanā* より *anusīhanā* の方がよいのではないかと思う。シラブルの点では問題ないし、文法的にも *vibhūta* と性数格を一致させたと考えれば *anusīhanā* の方がよいと思うが如何であろうか。御教示頂きたい。なおチベット訳でも「所作を成ずる無量の威力」と読んでいるから、*anusīhanā* と読んだのであろう。

二 その同じ佛が衆生を成熟させる因について

次に「佛が衆生を成熟させる因」について七偈(第四十九偈〜第五十五偈)が説かれる。安慧(73)によれば「先には菩薩行に住する時、かくの如く衆生を成熟させることを説く、今は究竟なる佛地を得て衆生を如何にして成熟するかを説く」とあるように、ここでは佛が佛地を得て後の衆生を成熟させる因について説くのである。

「善〔根〕⁽⁷⁴⁾を増長したる世人は清浄において最高に進む、また善〔根〕⁽⁷⁵⁾を積まないで善〔根〕⁽⁷⁶⁾の増長に

において最高に進む。かくの如く世人はすべての方処において、勝者の善説によって、未熟あるいは已熟として進む。しかしながらこの世では常に進むが無余にはない」(第四十九偈)

「善〔根〕を増長したる世人」とは、安慧釈によれば、⁽⁸³⁾「勝解行地や十地等の次第によって行ずるは、善を増長する世人といわれる」と説かれ、また「最高に進む」とは「佛地としての無住処涅槃を得るは最勝の清浄に行くといわれる」と説明されている。善根を積んだものは最高に進むが、⁽⁸⁵⁾「善根を積まないものも善〔根〕の増長において最高に進む」のである。すなわち、⁽⁸⁶⁾「未だ成熟していないものは、善〔根〕の増長において最高性に進みつつ、成熟に進む」のである。

四十九偈(d)の *vā ca* は *Lēvi* 本に *vā* と *ca* との間に *na* が入っていないが、*Lēvi* 自身の訂正(仏訳 p. 83 脚註)や長尾博士の訂正(xiii, l. 14)により、*na* を挿入した方がよい。この偈は *Lēvi* も指摘しているように17シラブルの *Sikharini* と一致するから、シラブルの上からいっても *na* が入らないと一シラブル不足する。大谷探検本の A 本(40a, l. 6)や B 本(42b, l. 3)にも *na* は入っていないし、*N_A* 本(26b, l. 4)にも入っていない。勿論 Bagchi

本(B, 45, l. 7)にも入っている。そこで「na……asasam」であるが、「無余にはない」ということは、安慧釈によれば「常に成熟を為し〔給う〕てもこの輪廻の住より衆生をあまねく尽くしたものとほならない」と説明されている。

⁽⁹⁰⁾*vrajanapākam* も *Lēvi* 自身の訂正(仏訳 p. 83 脚註)や長尾博士の訂正(xiii, l. 15)によつて *vrajan pākam* とされ、Bagchi 本(B, 45, l. 10)もそれに従っている。この訂正は正しいと思うが、大谷探検本は A 本(40b, l. 1)も B 本(42b, l. 5)も、それに *N_A* 本(26b, l. 6)も *vrajanapākam* のままである。なおチベット訳は *hgro bas smin pa* 「進むことによって成熟に〔進む〕」と訳している。

次に「衆生を成熟させる菩薩の成熟が希有なると希有でないとの相を説く」という第五十偈が説かれる。

⁽⁹²⁾「同様に、到達し難く、最高の功德と相応する未曾有を有する、常なる大菩提を、また帰依処なきものにとつて、恒常なる帰依処を、賢者は常に一切時に、⁽⁹⁵⁾すべての方処で得るということ、それは世間において希有である。〔しかし〕よく方軌によって行ずるのであるから、未曾有なことでもない」(第五十偈)⁽⁹⁶⁾「同様に(tathā)」というのは安慧釈によれば「先の⁽⁹⁷⁾

所説をいう、先の所説の如く、かの菩提は得難い」とあるように、「直前の第四十九偈の所説と同様に」の意である。そして続いて菩提品第一偈、第二偈（a—b）が引用されている。そのことについては、すでに述べたことがある。

「賢者」(chira) は常に一切時に、すべての方処で大菩提を得る」といわれ、安慧釈には「この得難い、大菩提は賢者によって常に得られる、という意である。それ(大菩提) が得られたとき、自利も円満となり、利他も円満と為し給う」と説明されている。そしてその大菩提を得るということは、「それは世間において希有なことである」(50d) といわれる。しかし「規則によって行ずるから未曾有ではない」(50d) といわれ、安慧釈によれば「規則は菩提を得ることに相応する道をいう」と説明されている。この偈はすでに武内紹晃教授によって大谷探検本の A 本、B 本を用いて検討されているが、ここに再検討してみよう。

五十偈②の *krivā caryam* は Lévi (仏訳 p. 83 脚註) や
長尾博士 (xiii, 7, 16) それに武内教授 (前掲論文, p. 79) の
訂正の如く *kricchārvāpāyam* であろう。大谷探検本 A 本
(40b, 7, 2) は、やや不明瞭であるが、*kricchā* か *kricchā*

かであらう。B本は *krichā* (42b, l. 6) のようにも見え
るが、*krichā* の誤まりであらう。N_A本は一応 *krichrā*
(26b, l. 7) のように読めるが、続いての文字が *cāyā* と
読めるのは、Lévi 本との混乱があるように思われる。
五十偈(b)の *niyān* は大谷探検本の A 本 (40b, l. 3) B
本 (42b, l. 7) それと N_A 本 (26b, l. 7) と *niyā* (*m*)
と読める。従って文法的には *mañābodin* (f. sg. Ac)
にかけて読む方がよいと思う。

五十偈(c)の欠落の部分は Lévi (仏訳 p.83 脚註) や長尾博士 (xiii, l. 17) の訂正の如く、⁽¹⁸⁾チヤット訳 phyogs phyogs から見ても *disi disi* [*sada*] であると思ふが、*ひやうわけか* A 本 (40b, l. 3) と B 本 (42b, l. 7) と N_A 本 (26b, l. 8) も、いずれもこの *disi disi* に相当する部分だけ欠落している。五十偈の長行の *tadanubhuya māga* は Lévi (仏訳 p.83 脚註) や長尾博士 (xiii, l. 19) の訂正の如く *tad-anurūpa-māga* である。B 本は *や* 不明瞭であるが、A 本 (40b, l. 4-1, 5) と N_A 本 (26b, l. 9) と *tadanurūpamāga* と読める。Bagchi 本 (p. 45, l. 17) もそのように訂正している。

五十偈の長行の ⁽¹⁰⁴⁾ nāścaryam | laksanam は Lévi (仏訳 P. 83 脚註) や長尾博士 (xiii, 7, 18) の訂正の如く nāścaryam

laksanam]の方がよい。B本(42b, l. 9)もN_A本(26b, l. 9)もシャッドはないが、A本(40b, l. 4)には明らかに lak-
sanam 二となっている。勿論 Bagchi (p. 45, l. 16) も
laksanam]に訂正している。

次に「同時に多くの方法により成熟せしめる方便加行
において、如何に、何処に住して、諸の衆生を調伏せし
めるかの因を説く」といわれる第五十一偈が説かれる。

「ある場合には、百の多くの方法によって法輪を、
ある場合には生と没とを、ある場合には種々なる
〔本〕⁽¹⁰⁷⁾生の行を、ある場合には完全な菩提を、そし
てまたある場合には度々涅槃を、説示する所の彼
〔佛〕菩薩」は、その住から動かず、一切を為し給
うのである」(第五十一偈)

ここで antarāhi (没)とは、安慧釈によれば「⁽¹⁰⁸⁾頭われ
ない」と訳されており、「同時に世間界において、ある
場合には頭われないと説く。菩薩の身より死ぬを説く
という意である」といわれるように、「生」に対する「死」
である。「種々なる〔本〕生の行」(51b)というのは、
安慧釈によれば「種々の生を行ずるは、菩薩の本生」⁽¹⁰⁹⁾
〔saṃsāra〕の行を為し給うをいう」と説明されている。「そ
の住より動かず、一切を為す」(51a)とは、世親釈には

「⁽¹¹⁰⁾無漏界よりである」とのみあるが、安慧釈によれば
「その住⁽¹¹¹⁾というは無漏法界をいう。種々の方便の事業を
為し給うて無漏界より動かず壊せず、それら一切の動の
相の事業を為し給うのである」と詳しく説かれている。

dharmācakraṃ (51a)は Lévi (仏訳 p. 84 脚註)や長尾
博士 (xiii, l. 20) の訂正の如く dharmyam cakram でよ
いであろう。ただし A本(40b, l. 5)も B本(43a, l. 1)も
dharmācakra のように読める。N_A本(26b, l. 9)は
dharmācakra のようであるが、やや不明瞭である。
チベット訳は chos kyi hkhor lo である。なおこの偈は
西尾教授によって、すでに法華經の如来寿命品の偈と対
比されている。

衆生を成熟させる加行の因について、次の第五十二偈
は説く。

「諸佛にはこれは私の成熟であると、この有身者
(dehin)は成熟されないものであると、更に又、今
や成熟される「であろう」という、かくの如き念は
起らない。しかし造作なくして、善法によって常に
すべての方処において、あまねく三つの方法(三乗)
で人々は成熟に至るのである」(第五十二偈)

ここで「造作なくして」(vinā saṃskāram)とは、安慧

釈に「分別を具しないので、無尽の衆生を成熟し給う時、

努力と精進もなし、無功用に為し給うという意である」

とあるように、「努力なくして無功用に、衆生を成熟させる」の意である。三つの方法(*trayamukha*)とは、世親

釈にもあるように三乗(*trānatraya*)によってである。五

十二偈の長行の *daśayati* は勿論 *daśayati* の誤植であろ

う。このことについては、すでに指摘したことがある。

なおこの偈は「佛説大乘入諸佛境界智光明莊嚴經」卷第

二(大正二二、二五七a—b)の「如日光明行闍浮提」の喩

説と一致することが西尾教授によって指摘されている。

次に「造作(努力)なくしての成熟」の譬喩が説かれる。

〔⁽¹⁹⁾あたかも努力なくして太陽(*bhānu*)が多くの明澄な放たれた光線をもって、すべての処にあまねく諸

の穀物の成熟を為す如く、そのように法という太陽

(*artha*)もまた、寂靜への手段としての法の、放たれた

光線をもって、すべての処にあまねく諸の衆生の

成熟を為す〕(第五十三偈)

この偈は「造作なくして衆生を成熟する太陽の譬え」であると安慧もいう如く、「諸佛が造作なくして諸の衆

生を成熟させる」という先の第五十二偈を、ここでは

「太陽が努力なくして諸の穀物を成熟させる」という譬喩でもって説いている。*āyatna* (努力なくして)は、世親註では *anābhisaṃskāra* (造作なくして)となっているから、これは同義語と考えてもよからう。

五十三偈(b)の *prapāka* は Lévi も長尾博士も宇井博士

も訂正はないが、荒牧氏と Bagchi とによって、*prapā-*

kam と訂正されている。この偈は17シラブルの *Sikharinī*

(若本文法一〇七頁)であるから、*U— — — — —*, *— UU*

U—UU— —UU— — とならなくてはならず、

第二詩節の初めが *prapāka-sa* (*UU—*) ではシラブルが

合わない。しかし *prapākan-sa* (*U— —*) ならシラブル

は合致するから、この訂正は正しいと思う。

なお大谷探検本はA本(41a, l. 4)もB本(33a, l. 8)も

それに *ṇa* (27a, l. 5) 本も、*prapāka* のままであるが、

これではシラブルが合わないから、やはり *prapākan* と

訂正すべきであろう。同じく五十三偈(b)の *ḍṣī* について

も、Lévi も長尾博士も宇井博士も訂正していないが、

荒牧氏と Bagchi とによって、*ḍṣī ḍṣī* と訂正されてい

る。チャット訳 *phyogs phyogs* から見ても、シラブル

の上からも、この訂正は正しい。

五十三偈(d)の *prapāka* はシラブルの点では問題はない

が、荒牧氏や Bagchi によつて prapākaṁ に訂正されてゐる。大谷探検本は A 本 (41a, l. 5) と B 本 (43a, l. 9) と prapākaṁ であるし、チベットの訳から見ても prapākaṁ でよいと思う。なお N_A 本 (27a, l. 6) は prapāka であるが、これではシラブルが合わない。

すべての処に (dīśi dīśi) というのは、荒牧氏の訳では「八方のいづこにも」となっているが、安慧釈には「十方」(phyogs bcu, 259-3-7, 259-4-2) とある。

「法という太陽」というのは、安慧釈によれば「無漏界は十二支分の教説が、光線の如く生じた因であるから、太陽の輪の如き故に法の太陽といわれる」と説明され、また「放たれた光線」というのは、安慧釈には「法を説くという意である」といわれるように、「佛の説法」を「太陽の光線」の譬喩をもつて説いている。なおこの偈は先の第五十二偈と同様に「佛説大乘入諸佛境界智光明莊嚴經」巻第二の「如日光明行闍浮提」の喩説と一致することが、すでに西尾教授によって指摘されている。

次に「展転して成熟せしめることが無尽なるを説く」といわれる第五十四偈が説かれる。この偈の原典については、すでに考察したことがあるので、ここでは論じない。

「譬えば一つの燈火より無量無数の、非常に大きな燈火の聚りが生じて、しかもその「一燈火」は更にそのために減に至らないように、そのように一つの成熟より無量無数の、非常に大きな成熟の聚りが生じて、しかもその「一つの成熟」は更に、そのために減に至らない」(第五十四偈)

この偈の基く經典は「維摩經」であることは、安慧釈によつても知られるが、このことについてはすでに西尾教授の指摘がある。従つてこの偈の意は「維摩經」の無尽燈を想起すればよい。その無尽燈のように「一つの成熟において多くの聚り無数無量の有情が生ずるが尽きない (Gāṇḍī) という中、それと似て如来は一有情を成熟し佛と爲し、この佛によつて多くの無数無量の衆生の聚りが成佛する。成熟しても遍く成熟する如来の智慧と法とを説き已ったり、減少することはない、という意である」と安慧釈には説明されている。

「佛が衆生を成熟させる因」の最後として、次の第五十五偈は「大海の譬えをもつて法界の不飽足と〔法界の〕不増大」を説くといわれる。

「譬えば大海が水によつて飽足に至ることなく、あるいは多くの清澄な水の流入によつて増大に至らな

いように、そのように佛なる界は、恒常なる、清淨に入るることによって飽足にも、増大にも至らない。

それがここにおける最高の希有である」(第五十五偈) 安慧釈によれば「譬⁽¹⁴³⁾えば大海に十方の、小さな河や、多くの河がここ(大海)に集まっても、「それほどに」

流れるに十分「満杯」であるとはしないが、多くの河がここ(大海)に入る余地を開けておくから、不飽足という意である」とあるように、大海に多くの河が流れて行っても不飽足であり、満杯とならないように、法界もまた不飽足であるといわれる。

また大海の譬⁽¹⁴⁴⁾の如く、法界は不増大であるといわれる。安慧釈には「大海は十方の多くの河と小河がここ(大海)に集まって常に流れても、大海はあふれることも増大もないから、不増大という意である」とあるように、これらによって佛なる界もまた、大海と同じように不飽足であり、不増大であると説こうとしている。そして「それはここにおける最高の希有である」(55d)といわれる。

五十五偈の長行の *dhyanādhikavṛt* は *Lēvi* ⁽¹⁴⁷⁾ や長尾博士や *Bagchi* ⁽¹⁴⁸⁾ によって訂正されているように、*cāna-dhikavṛt* ⁽¹⁴⁹⁾ の方がよい。チベット訳から見ても *anadhi-*

kavṛt と読めるし、大谷探検本 A 本 (41b, l. 3) も B 本 (43b, l. 6-7) も *cānadhikavṛt* となっている。N_A 本 (27b, l. 2) も *cānadhikavṛt* となっている。

む す び

先に年報に発表した菩提品第一偈〜第三十七偈に関するものよりも、今度の菩提品第三十八偈〜第五十五偈の方が難解であった。その上、山口博士の講義も第四十六偈〜第五十五偈は授業ではなかったので、意味を把握するのに安慧釈に頼らざるをえなかった。幸いチベット学僧、ツルチム師に教えられたところも多く、一応私なりに理解したつもりであるが、不十分な点など御教示頂ければ幸いです。

註

(1) 菩提品第三十八偈より第八十六偈までのテキスト校訂については、拙稿「大乘莊嚴經論(菩提品)の原典考」(印度学佛教学研究第二十九卷第二号一九三頁参照)。

(2) National Archives, Nepal. 目録では、*Sucpatram* (*Bauddhadarsanaviśaya*) p. 67 No. 202. この写本を手に入れるため、名大卒の高岡秀暢氏には大変世話になった。ここに感謝の意を表します。

(3) 無漏界甚深は菩提品第二十二偈〜第三十七偈で説かれ

る。(拙稿「大乘莊嚴經論の研究」——菩提品第一偈と第三十七偈を中心として——、大谷大学研究年報第三十二集、一〇六頁——一二〇頁参照。)

- (4) Lévi 本 p. 40, l. 17 参照。
- (5) Lévi 本 p. 40, l. 19 参照。
- (6) 影印北京版 256-1-7 (取意) 参照。
- (7) 影印北京版 256-1-7 参照。
- (8) 影印北京版 256-2-1 参照。(デルゲ版 *kyis*)
- (9) 影印北京版 256-2-2 参照。
- (10) 北京版 *thad na* (256-2-3, 256-2-5) とあるの *thad na* 「境界に於て」と訳せなごころをないが、(ロケーション チャンドリン *thad na = visaye*)、デルゲ版 (124b⁷, 125a²) *thad na* と *visaye* の *thad na* 「〜に關して」(concerning) と訳すこととした。(Melvyn C. Goldstein: Tibetan-English Dictionary of Modern Tibetan <Bibliotheca Himalayica, Ratna Pustak Bhandar, Nepal> 1978 p. 508-p. 509 参照。)
- (11) 影印北京版 256-2-4 参照。
- (12) S. Lévi: *Mahāyāna-sūtrāṇṣkāra*, Tome II, p. 80 脚註参照。
- (13) Nagao: *Index to the Mahāyāna-sūtrāṇṣkāra* (Part One) xiii, l. 8 参照。
- (14) 影印北京版 256-2-5~6 参照。
- (15) 西尾教授「佛地經論之研究」二五頁参照。
- (16) 瑜伽論菩薩地 *prakāra-prabheda* (SK, p. 37, l. p. 5, 304, l. 3) は「品類差別」(大正三〇四八六 a

五五〇 a) と漢訳されている。(宇井博士「菩薩地索引」四七四頁参照。)

- (17) Lévi 本 p. 40, l. 22 参照。
- (18) 影印北京版 256-3-7 参照。
- (19) Lévi 本 p. 41, l. 3 参照。
- (20) 影印北京版 256-4-7 参照。
- (21) Lévi 本 p. 41, l. 4 参照。
- (22) Lévi 本 p. 41, l. 3 参照。
- (23) Lévi 本 p. 41, l. 5 参照。
- (24) 影印北京版 256-5-1 参照。
- (25) 北京版は *reg bya ses par nus pa* (256-5-2) とあるが、デルゲ版は *reg bya la ses par nus pa* (126a, l. 4) とある。
- (26) 山口博士講義ノート参照。(私が修士一回の時に授業で受けた講義ノートである。) 安慧釈影印北京版 256-4-7~256-5-2 参照。
- (27) 影印北京版 256-5-3 参照。
- (28) 「坂本華男 岩本裕 法華經 下」(岩波文庫) 九〇頁並びに三四頁参照。
- (29) 西尾教授「佛地經論之研究」二六頁参照。
- (30) 山口博士の講義ノート参照。
- (31) 山口、野沢博士「世親唯識の原典解明」五四頁参照。
- (32) S. Lévi: *Vijñaptimātratāsiddhi* p. 5, l. 25 参照。
- (33) 影印北京版 256-5-5 参照。
- (34) Lévi 本 p. 41, l. 1 参照。

- (34) Nagao Index xiii, l. 9
- (35) Lévi 本' p. 41, l. 7 参照。
- (36) 影印北京版 257-1-3 (取意) 参照。
- (37) 影印北京版 257-1-5 参照。
- (38) Lévi 本' p. 41, l. 9 参照。
- (39) Lévi 本' p. 41, l. 11 参照。
- (40) 宇井博士は漢訳に「受」とあるから「受」と訳されたものと思われるが、「受」では vedana と混同しやすい。宇井博士自身も、求法品第四十偈の長行では udgraha に對して「取」という訳語を与えている。(宇井著「二二一頁参照」)
- (41) Lévi 本' p. 41, l. 13 参照。
- (42) 影印北京版 257-3-2 参照。
- (43) Lévi 本' p. 41, l. 15 参照。
- (44) 影印北京版 257-3-8 参照。
- (45) 影印北京版 257-3-8~4-1 参照。
- (46) 影印北京版 257-4-1 参照。
- (47) 影印北京版 257-4-2 参照。
- (48) 影印北京版 257-4-3 参照。
- (49) 山口博士の講義ノート参照。
- (50) Lévi 本' p. 64, l. 27 参照。野沢博士「梵文大乘莊嚴經論にあらわれたる三性説管見——求法品第十一を中心として——」(大谷学報第十九卷第三号) 五八頁註 14 参照。高崎直道博士「入楞伽經の唯識説」(佛教学創刊号) 一三頁——一四頁参照。
- (51) Lévi 本' p. 65, l. 4 参照。
- (52) Lévi 本' p. 66, l. 8 参照。拙稿「四自在と十自在——初期唯識論書を中心として——」(印度学佛教学研究第二十六卷第一号) 三六五頁参照。
- (53) 高崎直道博士「入楞伽經の唯識説」(佛教学創刊号) 一四頁参照。(三種三種の顯現の用語は高崎博士の論文に従った。)
- (54) Lévi 本' p. 41, l. 19 参照。
- (55) acale を長尾博士の訂正 (Nagao Index, Part One xiii, l. 10) に従う。amale として読むことにした。
- (56) 影印北京版 257-4-5 参照。
- (57) Nagao Index (Part One xiii, l. 10)
- (58) Mahāyānasūtrālamkāra Tome II p. 81 脚註参照。
- (59) Bagchi: Mahāyānasūtrālamkāra p. 44, l. 16 参照。
- (60) 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」(一五六頁) には「不動向」とあるが、「不動句」の誤植。(再版本にも訂正はな。)
- (61) 影印北京版 257-5-1 参照。
- (62) Lévi 本' p. 41, l. 23 参照。
- (63) 影印北京版 257-5-3 参照。
- (64) 影印北京版 257-5-5 (取意) 参照。
- (65) 菩提品第四十一偈、第四十六偈では parāvṛtti (転依) が用いられているが、ここでは vyāvṛtti が用いられる。Schmithausen もいわれるように、これは「韻文の理由から」(aus metrischen Gründen) と思われるが、Schmithausen と勝呂博士の指摘られる如く、vyāvṛtti には除去 (Beseitigung) や中断 (Aufhören) の意があり、其

た安慧釈にも *spais = prahā* と註釈されている。特に第四十六偈は *parāvṛtti* ではあるが、姪欲の転依 (*parāvṛtti*) の意であるから、第四十七偈の *vyāvṛtti* と同義に解せられる。従って *parāvṛtti* に「除去」の意があることにならうと思われる。(Schmithausen: *Der Nirvāṇa Abschnitt in der Vinīśayasamgrahaṇi der Yogācārabhūmi*, Wien 1969, p. 96, l. 4. 1. 16. 勝田博士「唯識説における真理概念」(法華文化研究第二号) 六一頁参照。)

(66) Lévi 本, p. 42, l. 2 参照。

(67) *vibhavana* は *vi/bhū* より成れる語であって、モニエルの字典によれば、*causing to appear, examination, judgment* などの訳があるが、チベット訳 *nam par byed pa* (ロケーシュチャンドラ *pariśā, pravicaṇa, vicaya, vibhāṅga*) を参照して「觀察」と訳すことにした。安慧釈に「色を破壊する」(258-1-2) とあるが、「色を觀察すること」が、「色を破壊して觀察することになる」と思う。脱稿後、小谷信千代氏が *vibhāṇayan* に「破壊」と「觀察」の両意があることを論じておられることを知った。〔印度学佛教学研究〕第二十九卷第一号四一八頁参照。〕

(68) 安慧釈では「三種の最勝の威力を得る」(257-4-8) とあるが、第二の威力を二つに分けて説明しているからだと思ふ。

(69) 影印北京版 257-5-8 (取意) 参照。

(70) 影印北京版 257-5-7 参照。

(71) Lévi 本, p. 42, l. 6 参照。

(72) Lévi 本の如く、*anūṣṭhānād* と読めば、「成ずるからである」となるが、もし、大谷探検本、B 本のように *anūṣṭhānā* と読めば、「成ずる」となるかと思う。

(73) Lévi 本, p. 42, l. 8 参照。

(74) 影印北京版 258-1-7 参照。

(75) 中は写本では・点であるので、写本の誤まりということも考えられるので、() の中に入れておいた。

(76) *SK. nimitta* (因相) であるが、チベット訳 *rgyu* (因) を参照して訳した。

(77) 影印北京版 258-2-5 参照。「先には」とは第八章成熟品のことであろう。

(78) Lévi 本, p. 42, l. 11 参照。

(79) 直訳すれば、「浄(または善)において増長したる」であるが、今は世親釈に *kusalamūla* (善根) とあるし、漢訳にも「善根」とあることを考慮して訳した。

(80) 直訳すれば、*anārabdhya* は *an-ā-rah+ta* であるから、「企てずして」(宇井著一五八頁) となるが、今は意訳した。

(81) *dhruvan* は第五十偈の *dhruvan* の用法から見ると、「常住なもの」と訳した方がよいのかもしれないが、今は世親釈 *nityakāla* と、安慧釈に「断絶なく輪廻の辺際に至る迄」、「成熟を」為し給うから、常となるといわれる」(北京版 258-2-9) によって訳した。

(82) S. Lévi や長尾博士の訂正により *na* を入れて訳した。

(83) 影印北京版 258-2-8 参照。

- (84) 影印北京版 258-3-1 参照。
- (85) Lévi 本' p. 42, l. 16' 影印北京版 258-3-1 参照。
- (86) Lévi 本' p. 42, l. 17 参照。
- (87) Lévi 本' p. 42 脚註(2)参照。
- (88) 影印北京版 258-3-8 参照。
- (89) チョーラ訳 mdsad pa は byed pa の尊称である。
- (90) Lévi 本' p. 42, l. 17 参照。
- (91) Lévi 本' p. 42, l. 23' 安慧釈' 影印北京版 258-4-2 参照。
- (92) Lévi 本' p. 42, l. 19 参照。
- (93) kṭvā caryām は Lévi や長尾博士や武内教授の訂正によつて kṛcchrāvāpyām として読んだ。
- (94) nityam は f. sg. Ac による G による mahābodhim (f. sg. Ac) にかけて読んだ。
- (95) Lévi 本 (p. 42, l. 21) では欠落しているが、Lévi や長尾博士の訂正によつて dīśi dīśi sadā として読んだ。
- (96) 影印北京版 258-4-3 参照。
- (97) 影印北京版 258-4-3 参照。
- (98) 拙稿「大乘莊嚴經論の研究——菩提品第一偈と第三十七偈を中心として——」(大谷大学研究年報第三十二集) 九二頁参照。
- (99) Lévi 本' p. 42, l. 21 参照。SK. dhīra に相当する チョーラ訳は北京版 (69-5-3) では bstan nams となっているが、デルタ版 (158a³) 並びに獨頌のみの北京版 (7-1-2) では bstan nams となっている。
- (100) 影印北京版 258-4-4 参照。
- (101) 影印北京版 258-5-6 参照。
- (102) 武内教授「大谷探検隊招來の『大乘莊嚴經論』について」(龍谷大学論集第三五二号) 七八頁—八〇頁参照。
- (103) 影印北京版 69-5-3 参照。
- (104) Lévi 本' p. 42, l. 23 参照。
- (105) Lévi 本' p. 43, l. 7 参照。[取意]
- (106) Lévi 本' p. 43, l. 3 参照。
- (107) 世親釈 (Lévi 本' p. 43, l. 8) 並びに安慧釈 (北京版 259-1-4) によつて補いた。
- (108) mi snan ba (影印北京版 259-1-3) 参照。
- (109) 影印北京版 259-1-3 参照。
- (110) 影印北京版 259-1-4 参照。
- (111) Lévi 本' p. 43, l. 9 参照。
- (112) 影印北京版 259-2-2 参照。[取意]
- (113) 影印北京版 69-5-5 参照。
- (114) 西尾教授「佛地經論の研究」二七頁参照。
- (115) Lévi 本' p. 43, l. 10 参照。
- (116) 影印北京版 259-2-7 参照。
- (117) 拙稿「大乘莊嚴經論(菩提品の原典考)」(印度学佛教学研究第二十九卷第二号) 一九六頁参照。
- (118) 西尾教授「佛地經論の研究」二四頁参照。
- (119) Lévi 本' p. 43, l. 16 参照。
- (120) amśvisara ḥ visara は vi-√śi より成れる語であつて ①going forth or in various directions, spreading, extension となる意で ②a multitude, quantity となる意とがある。荒牧氏は後者の意に解し、「多大」と訳

されたが〔撰大乘論の依他起性〕インド学試験集、Nos. 45, p. 60〕、宇井博士は「光明を放つ」意に解しておられる。私は漢訳が長行で「放光」であること、安慧釈が *blan ba* (259-3-5, 259-3-7) とあることから、「放たれた〔光線〕」と訳すことにした。

(121) 影印北京版 259-3-5 参照。

(122) 荒牧典俊氏「撰大乘論の依他起性」(インド学試験集 Nos. 4-5) 六〇頁参照。

(123) *Bagchi* 本、p. 46, l. 4 参照。

(124) 荒牧氏「前掲論文」六〇頁参照。

(125) *Bagchi* 本、p. 46, l. 4 参照。

(126) 荒牧氏「前掲論文」六〇頁参照。

(127) *Bagchi* 本、p. 46, l. 6 参照。

(128) *nam smin mdsad* (70-1-3) は五十三偈(g)の *prapākaṃ prakurute* のチヤム記 *nam smin byed ba* (70-1-2) とは一致する。

(129) 荒牧氏「前掲論文」六〇頁参照。

(130) 影印北京版 259-3-8~4-1 参照。

(131) 影印北京版 259-4-2 参照。

(132) 西尾教授「佛地経論之研究」二四頁参照。

(133) 影印北京版 259-4-3 参照。

(134) 拙稿「大乘莊嚴経論(菩提品)の原典考」(印度学佛教学研究第二十九卷第二号)一九四頁―一九五頁参照。

(135) *Lévi* 本、p. 43, l. 21 参照。

(136) *buddhād* は *pākād* と訂正して読んだ。(Nagao Index xiii, l. 21. 拙稿「大乘莊嚴経論(菩提品)の原典考」)

九五頁参照。

(137) *sa* を入れて読むことについては拙稿「前掲論文」一九五頁参照。

(138) 影印北京版 259-4-7 参照。

(139) 西尾教授「佛地経論之研究」二五頁―二六頁参照。

(140) 影印北京版 259-4-5 参照。

(141) *Lévi* 本、p. 44, l. 6 参照。

(142) *Lévi* 本、p. 44, l. 2 参照。

(143) 影印北京版 259-5-4 参照。

(144) 影印北京版 259-5-5 参照。

(145) *Iud pa* はロケーシュチャンドラやダスの辞典によると、「普通は「咳」や「痰」の意であるが、ここでは動詞

の *to boil over* (flashed, p. 549) の意である。チヤットの学僧、ツルチム師の御教示を得た。ここに感謝の意を表します。

(146) 安慧釈、影印北京版 260-1-1 参照。

(147) *Lévi* の仏訳、p. 85 脚註参照。

(148) Nagao Index xiii, l. 23 参照。

(149) *Bagchi* 本、p. 46, l. 18 参照。

(150) 影印北京版 70-1-7 参照。

(151) 拙稿「大乘莊嚴経論の研究——第一偈と第三十七偈を中心として——」(大谷大学研究年報第三十二集)

(152) 私が修士一回の時に受けた山口益博士の講義のことである。

(五十六年二月二十五日脱稿)